



動物は約8ヶ月齢の雄のウズラである。このウズラはN研究所で繁殖用に飼育されていたうちの1羽であったが、両翼の伸展・拳上が不能となり、その上繁殖能力も減退して来たので放血殺を行い解剖に付した。

外部に外傷その他の異常は認められず、剥皮後の所見では、胸筋は筋固有色を失って黄白色を呈し、且つ軽度の萎縮を示していた。該筋に割を加えると湿潤著しく、透徹の度を減じているほか、とくに限局した病巣は認められなかった。その他の骨格筋ならびに一般諸臓器は肉眼的に軽度の萎縮を認めたほか著変を欠いていた。

骨格筋の組織学的所見は、肉眼的に変化を認めた浅胸筋(図1)、深胸筋(図2)において筋繊維の消失、残存筋繊維の大小不同が目立ち、補空性に脂肪組織の増殖が認められた。いずれも間質結合組織の増殖は軽度で、再生筋繊維は殆ど認められず、筋周膜は脂肪組織となって幅を増すが遊走細胞の出現は全般にわたって極めて微々たるものであった。筋繊維の大小不同は著しいが、splittingの像は認められなかった。これらの筋繊維の空胞形成が著しいが、コーンハイム野を明視し得るものが大部分であった。また、新鮮な塊状変性や組織球による消掃を伴う変性筋繊維が点在し、周辺性あるいは中心性sarcoplasmic massの像もしばしば認められた。提出標本

以外の、また肉眼的に著変を認めなかった前・後肢筋においても筋繊維内に大小の多数の空胞を形成したものが多く、小さい空胞の内容はPAS陽性を示していた。骨格筋以外でも心筋および全身の平滑筋組織に著明な変化が認められた。すなわち、心筋は全体にわたって空胞形成が目立ち、その多くはエオジン淡染ないし弱塩基性に染まる内容を満たすものがあり、それらはPAS強陽性を示した。しかし、横紋は良く保たれ、核の変化も乏しかった。また、筋胃、消化管筋層、全身の小動脈壁も同様の性質を示す空胞形成が目立っていた。その他、肝細胞の空胞化、精巢の萎縮があった。

鳥類において筋肉病変を主病変とした病は少ない。強いて本症例と類似した疾病を挙げるならば、幼若なアヒルにおける数編の報告例とニワトリの遺伝性筋ジストロフィーがあるが、その病変性質から見て異種のものと考えられる。今回の症例は原因学的に不明とするほかはないが単純に栄養性のもとは考えられず、遺伝的要素も考慮しなければならないだろう。提出標本の診断は一応「ウズラの筋ジストロフィー」とした。なお、報告後に同じ系統のウズラで同種の症例を2例得たことを付記しておく。

(写真 H·E X100)